

深イ～話！

No.8

～メルマガで送られてきた心にしみるお話からです～

彼女の生家は代々農家。もの心つく前に母親を亡くした。
だが、寂しくはなかった。父親に可愛がられて育てられたからである。

父は働き者であった。
3ヘクタールの水田と2ヘクタールの畑を耕して立ち働いた。
村のためにも尽くした。
行事や共同作業には骨身を惜しまず、ことがあると、まとめ役に走り回った。
そんな父を彼女は尊敬していた。父娘二人の暮らしは温かさに満ちていた。

彼女が高校3年の12月だった。
その朝、彼女はいつものように登校し、それを見送った父はトラクターを運転して
野良に出て行った。
そこで、悲劇は起こった。
居眠り運転のトレーラーと衝突したのである。

彼女は父が収容された病院に駆けつけた。
苦しい息の下から父は切れ切れに言った。
「これからお前一人になる。すまんあ・・・」



そして、こう続けた。
「いいか、これからは、“おかげさま、おかげさま”と心で唱えて生きていけ。
そうすると必ずみんなが助けてくれる。
“おかげさま”をお守りに生きていけ。」
それが父の最期の言葉だった。

父からもらった“おかげさま”のお守りは、彼女を裏切らなかった。
親切にしてくれる村人に、彼女はいつも「おかげさま」と心の中で手を合わせた。
彼女のそんな姿に村人はどこまでも優しくなった。
その優しさが彼女を助け、支えた。

父の最期の言葉が、娘の心に光を灯し、その光が村人の心の光となり、さらに照り返して彼女の生きる力となったのだ。